

ふるさとの婆羅門

狭川 一三

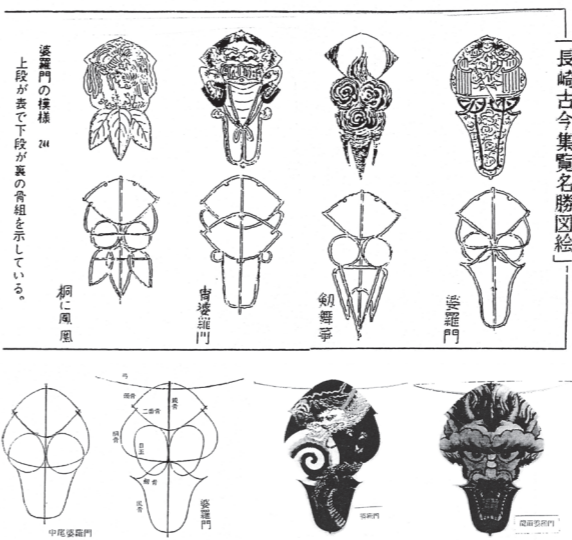
私は長崎市近郊の古賀村で育ち、子供の頃からハタや婆羅門に親しんで来ました。厚い和紙をバラモンガミ、薄い紙をハタガミと云い、太い紐をバラモンヨマ、細いのはハタヨマと言っていた覚えがあります。

「正月三日、盆三日、節句は三日で妙がない」と唄い、春のハタ揚げを惜んだものです。大阪に来て二〇余年も経った頃、故郷の婆羅門を作って揚げ、各地の伝統風も観るうちに「長崎歳時記」等と古い資料も見て驚きました。それは、子供の頃から私が作って居た婆羅門が骨組も絵柄も全く同じ状況で各地に伝承されて来た事を知り感動しました。

婆羅門が何時長崎に伝えられたかわからないが、長崎市史で紙鳶は永禄年間、長崎開港当時に揚られて居たといひ、元和年間(一六二二頃)には数多く揚られ、一六七〇年頃になると「見渡せば長崎のぼりいかのぼり」という西山宗因の句が有ります。「長崎のぼり」とはハタ、「いかのぼり」は婆羅門です。寛文時代(一六六一―一七二

には唐人風やハタも盛んに行われて居り、天文学者西川如見著の『町人袋』に「今日いかのぼりは大きく作り弓を付けて空に鳴り響くをよしとす」と記してあります。

この頃、唐に係わる用語として唐人船、唐人踊り、唐鍬、唐獅子、唐墨、唐紙等々があり、唐文化の影響を受けた事は大きく、長崎市史で「婆羅門は唐土の風箏に他ならない」と云い、風箏とは竹を弓なりに曲げ弦を付け、紙鳶の頭に



バラモンの絵図

県外にも幾つもの唐人風が伝えられて居ます。

郷里古賀で、二〇〇五年春ハタ等でなく「唐人系の風」大集合と呼び掛け、県内丈で十四種九〇枚を持ち寄り、松原自治会・長崎市植木組合主催で「婆羅門揚げ大会」を催し長崎観光協会、JR九州、歴史文化協会、ハタ揚げ振興会、古賀地区自治会、浄安寺、風の会風人の後援で、新聞やテレビ局も多く来てくれ盛会でした。然し当日は風が弱く期待した「唸の大響演」と云う処までは行きませんでした。展示した十二種の唐人風に参加者の手に触れて頂き、解説する事ができました。

婆羅門。古賀村では昔から一間婆羅門と云い青年や大人が揚げ、子供は半間物やハタ・奴バタでした。骨組は縦骨に頭骨、二番骨、胴骨、目ん玉、剣骨尻骨から成り、和紙を貼り絵は墨で雲龍の絵を画き、色は少々でした。其の後、他の唐人風を見ると骨組と絵は合っており、婆羅門も骨組に合うはずと目ん玉の骨に目を、龍の鬚を剣骨に画けば必然と龍の顔に成ります。元の画は此れだと確信し今は龍面婆羅門も作って居ます。

剣舞等(ケムソウ)。上部の骨組は婆羅門と同じ、下部は先が尖って居り三本剣の如く鼎立しています。絵は通例月に雲を画く。**桐に鳳凰**、上部の骨組は婆羅門と同じで鳳を大きく画き下には桐の花と葉三枚を並べる。弓と尾を付ける事婆羅門と同じ。**青婆羅門**、杵岐の資料館にある古い画は鬼が正面から咬付き鍬形が下に折れ曲って闘いの凄さを感じる裏冑の画です。杵岐の(鬼風)平戸の(鬼ようちよう)五島の(バラモン)の三通りに分れているのが骨組を見ると良く判ります。「鬼風」は鬼を大きく冑を小さく画き下部に武者の顔を画く表冑の画で鍬形の処は獅々口で、「鬼ようちよう」は鬼の顔を大きく画き冑は小さく下部に武者を大きく画き表冑とし、「バラモン」は鬼頭を小さく冑を広く大きく画き、鬼の髪が降りて丸めてあり裏冑の画です。

福岡に伝わる「小倉唐人」や戸畑の「孫次とうじん」の骨組も冑婆等門と同じで下部の骨は下に尖って居り、画は龍が多い様です。山口県の下関にも同じとうじんが盛んで種類も多く盛大な風揚げがなされて居た様です。熊本「天草バラモン」は唐人風独特の湾曲骨でなく直線の骨組が主体で画も鶴に日輪、下に桐の葉を画き年代が下ついていると思われまふ。「福島の会津唐人」も長崎から伝わり戊辰の役で総攻撃を受け落城寸前の鶴ヶ城の天守閣の上に揚って居ました。之は、江戸の瓦版で刷れた画と聞きました。

風信

(大阪市在住)

〇五月と言えば、野にも山にも若葉が繁り、五月二日は夏も近づく八十八夜で春まっ盛り、「春の海は ひねもす のたりのたりにかな」といふ。

〇然し今年の春の海は、朝鮮半島の緊張。尖閣諸島の事。そして我が長崎県では佛像を早く帰してもらいたいものです。

〇つい先日は東京から来られたお客様が、「今は初鯉の季節ですよ」と言われたが、

付け揚げ放つと風を受け響をなす。紙鳶そのものより梵天という概念に達し雄大崇高の意味を含んでいる。長崎事典でも婆羅門はサンスクリット語の「梵天(寂靜清淨の天界)」といい、唐人風は頭に弓を付け弦を張り唸りを競い楽しむことが常であり、今でも中国では風のことを風箏(フォンツェン)と云って居ます。

昔は紙老鴿(シロウシ)紙鳶(シエン)鳳巾や風箏があり、関東では(たこ)、京阪で(いかのぼり)、上野や信濃で(たか)、西国で(たつやふうりゆう)、四国で(釣鐘イカやゴンボウイカ)、大阪で(仙花イカや丸イカ)、杵岐や平戸で(ヨウチヨウキウ)、山口では(ヨウズやトウジン)と云われ、長崎や伊勢で(ハタ)、博多で(たかばた)、奥州で(てんばた)と各地に風名があります。

木の葉で作った風が原始的な風とも言われており、ハタの「ハ」は木の葉や鳥の羽のように、薄くひらひらしたものの意(日本古語大辞典)。「タ」は接尾語でハタを言う説等を見ると、「ハタ」が最も古い言葉ではないかと思われまふ。

長崎歳時記に「藤は至極薄くさきて用ゆ、風を受け大象がうなるが如し」とあります。長崎の古賀でも弦は藤でしたが、処によつては河豚の皮、桜の木の皮、棕櫚の葉柄、竹を細くしたものの、馬や牛の皮等々が有り、上級の物は「鯨のひげ」だったとか。唸の音色が悪いと調整して揚げなおしたものです。

川原慶賀の絵にある様に昔から唐人風とハタは永らく揚げられていたが、特にハタは盛んになり、渡辺庫輔氏の「長崎ハタ考」にある様にハタに熱狂し、長崎奉行は何回もハタ揚げの禁令を出しています。

しかしハタ揚げは絶える事なく現在も続いています。それに比べ婆羅門は旧市内では昭和の始めで終わりますが、市近郊では引き続き集落毎に婆羅門が揚り、春風に響く唸は忘れられません。

『長崎古今集覧名勝図絵』に最も古いと思われる四種の唐人風があり、其れは「婆羅門」「剣舞等」「冑婆羅門」「桐に鳳凰」の図です。骨組は今も此の通りですが絵は変わったものもある様です。其ののち、唐人風は何種も作られ、島原で「重ね扇」「鶴亀」「ケンボウソウ」、五島では「日の出鶴」等数多く作られ、さすがに長崎は風処です。又、

長崎の魚屋さんには初鯉は見かけませんでした。

〇続いて、五月五日は端午の節句と言われるが、これは旧暦の五月五日が本当の端午の節句で、現在暦の五月五日では季節的に少しあわないような気がする。本当の五月五日は現在暦では六月十三日だそうである。

〇『長崎歳時記(寛政九年「長崎の人」野口文龍著)をみると端午の節句は初夏の行事の項に取りあげ詳しく記してあるので一覽しておかれるとよい。(尚、同書は長崎県史第四史料編に収録されている。)

〇長崎の五月節句の特色は二つある。其の一つは、鯉のぼりの揚げ方である。其の事は昔唐船の人達より教わった揚げ方で、先ず一本の大柱を立て、其の先端に引き上げ用の小車をつけ、鯉のぼりを多く吊り下げた青竹を其の柱に引きあげている。他の一つは長崎の人達が食べる唐あく粽(もち)である。「唐あく」とは唐船の人達が舶載して来た物で、何んとも言えぬ句があるので他国の人達にはあまり好まれないと言う。この粽は先ず糯米と米をほどほどに混ぜて一晩トウアク汁に漬け、翌日これを木綿の袋に入れ、茹であげて出来あがる。次に食べる時には袋より取りだし、木綿糸を口にくわえて輪切にし、皿に入れて砂糖等をかけていただくのである。

〇この「トウアクの文化」は沖繩・鹿児島・宮崎の一部地区にも伝えられており「我が国食文化研究」の一つとしても取りあげられている。但し、現在の「トウアク」は戦前の物とは少し違っているとの事である。

〇次に来月、六月一日には「長崎くんち小屋入り」の日である。今年には本協会がある桶屋町が七年越しに回りくる踊町に当るので、原自治会長さんより「先例のように町内行事に御参加下さるようにとの御依頼あり、前回も協力いただいた会員の方々を中心に有志一同参加させて頂く事にした。御参加いただく皆さんは紋付袴に山高帽等と其の準備が大変である。

〇今月は次の書籍を御寄贈いただいた。

『祭りによるまちづくり』先年来、長崎国際大学に留学されていた章潔氏の博士論文で長崎のくんちとラタン祭を都市研究問題として取りあげられた特異な論文だった。

『長崎純心大学人文研究 no.19 論文・報告・研究ノート』を主に編集。特に「尖閣新説四」には目を引かれ、宮崎賢太郎先生の「オラシヨ資料五島編」は大いに参考になった。

(長崎純心大学発行)
『野村美術館紀要 no.22』今回の編集には、今までにあまり発表された事のない韓国茶文化の特集があり、資料として各方面より注目されている。(京都・野村美術館刊)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

